

## 近世仮名法語と近代文学における「～底（ノ）」について<sup>1</sup>

李 長波

### 0. はじめに

漢文と日本語の文法史、文体史との関わりについては、山田孝雄の優れた先行研究（『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』、昭和十年、寶文館）以来、文法、語彙にわたって数多くの研究成果が蓄積されてきた。それに比べて、中国語の口語と日本語の文体史、文法史との関わりについてはまだ十分に注目されておらず、研究成果も語彙に関するものが多く、文体史、文法史に関するものは管見の限り少ないようである。筆者は数年前平成 10～14 年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（A）118「古典学の再構築」に参加したのを機会に、中世禅宗仮名法語を日本語文体史の資料として用いることによって中国語口語と日本語文体史との関わりを明らかにしようと試みている。その成果の一部は、「日本語文体史資料としての中世禅宗仮名法語の研究―連体修飾節に用いられる「～底（ノ）」を中心に―」と題して、平成 10～14 年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（A）118「古典学の再構築」の研究成果報告集 VII『伝承と受容（日本）』（文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（A）「古典学の再構築」総括班編、12-25 頁）に発表した（以下前稿と略す）。そこでは、近世中国語口語の助詞「底」を例として、道元禅師『正法眼蔵』において最初に観察されてから、中世後期の抜隊禅師と月庵禅師の仮名法語において主に連体修飾節に用いられるものとして日本語化するに至った過程を記述した。

本稿は、前稿に引き続いて近世仮名法語及び近代文学における「～底（ノ）」の用法を調査した結果をまとめたものである。

### 1.1 基本資料と書誌

本稿に用いる近世仮名法語の主な資料は以下の通りである。

<sup>1</sup>本稿は平成 16 年度より交付を受けている科学研究費基盤研究（C）「中国語口語との関わりを中心とした中世の仮名法語と禅宗抄物の文体史的研究」の成果の一部である。

## 一、鈴木正三『驢鞍橋』（鈴木大拙校訂、岩波文庫、一九四八年）

書誌：鈴木大拙の解説によれば、『驢鞍橋』は「正三の弟子惠中の輯めたものである。正三が、慶安元年、七十歳のとき江戸に出て、それから七十七歳で遷化するまで七年の間に、彼が師の身邊で見聞したところを記したものである」という。

## 二、白隠禅師：

『遠羅天釜』鹿苑寺所蔵本、芳澤勝弘編注『白隠禅師法語全集』第九冊所収。

『夜船閑話』京都法輪寺所蔵本、芳澤勝弘編注『白隠禅師法語全集』第四冊所収。

『假名因縁法語』河辺和年氏所蔵本、芳澤勝弘編注『白隠禅師法語全集』第十一冊所収。『布鼓』加藤正俊氏所蔵本、芳澤勝弘編注『白隠禅師法語全集』第十一冊所収。

書誌：

## ①『遠羅天釜』：

一、『遠羅天釜』卷之上、「鍋島棧州殿下ノ近侍に答ウル書」卷末「延享第五戊辰曆仲夏二十五莫）」

二、『遠羅天釜』卷之中、「遠方ノ病僧に贈リシ書」卷末刊記なし

三、『遠羅天釜』卷之下、「法華宗ノ老尼に贈リシ書」

## 三の二 旧友の僧の批判に答える

芳澤勝弘氏によれば、『遠羅天釜』が最初に上梓されたのは、右の一～三（三の二も含む）の部分で、自筆刻本として刊行された。卷之上の卷末に「延享第五戊辰曆仲夏二十五莫）（延享五年五月二十五日、一七四八）」とあり、序に「寛延己巳歳初春日（寛延二年正月、一七四九）」、跋に「寛延第二龍舎己巳仲春日（寛延二年二月）」とあるので、寛延二年（一七四九）二月以降に刊行されたものとなる。（芳澤勝弘編注『白隠禅師法語全集』第九冊「遠羅天釜解説」禅文化研究所、531-532頁）

## ②『夜船閑話』：

同じく芳澤勝弘氏によれば、宝暦七年（一七五七）、白隠七十三歳。『夜船閑話』の序および本文末には「孟正廿五日」とあり、また「宝暦七丑二月」という刊記のものもあるが、実際に完成したのは五月ころであったことが、「禅恕首座に与ふ」（龍吟社版『白隠和尚全集』第六卷、四八八頁）という書簡によって分かる（芳澤勝弘編注『白隠禅師法語全集』第四冊「夜船閑話解説」禅文化研究所、245頁）

## ③『假名因縁法語』：

版本はなく、写本のみで伝わる。（中略）底本は、唯一伝わる、河辺和年氏所蔵になる自筆写本である。（中略）この物語には題名が付けられていないが、巻末の大観文珠

(阿鼻窟)の極書にある「假名因縁法語」をもって題名とした。書かれた時期は不明であるという。(芳澤勝弘編注『白隠禪師法語全集』第十一冊「假名因縁法語・布鼓解説」禅文化研究所、437-438頁)

#### ④『布鼓』:

全五巻、二十三話の因縁話を集録する。底本には、宝暦三年(一七五三)、京都、吉田屋三郎兵衛、日野屋半兵衛の刊本(加藤正俊氏蔵)を用いた。これは『布鼓』(巻之一)と『再鞞布鼓』(巻之二~五)の二部分に分かれる。『布鼓』(不孝ノ子ニ贈リシ書)は白隠が三十歳の時に書いたもので、『再鞞布鼓』はのち、延享四年、禪師が六十三歳の時に加えたものである(「布つづみの序」)。(芳澤勝弘編注『白隠禪師法語全集』第十一冊「假名因縁法語・布鼓解説」禅文化研究所、438頁)

### 1.2. 白隠とその著書

鎌田茂雄「白隠—その全体像と思想的特質—」(日本の禅語録十九『白隠』、講談社)によれば、「白隠は鎌倉時代の大応国師、大燈国師、無相国師(関山慧玄)のいわゆる応燈関の日本臨済禅の流れを汲むものである。中国禅の日本化という意味では道元と白隠はその双璧であるといえる。」(35-36頁)という。その著書を性格によって大きく分けると、漢文語録と仮名法語といったが、漢文語録はどこまでも中国の臨済禅や、応・燈・関の日本臨済禅の継承であり、伝統のあくなき踏襲である。「漢文語録を向上門にたとえれば、仮名法語は向下門であり、強烈にはたらく利他の行願が人々に親しまれ、理解される書を書かせたのであろう」(前掲書、35-36頁)。

一方、白隠と盤珪とを比較して、鎌田茂雄氏は両者の違いを次のように指摘する。

白隠と盤珪という近世のすぐれた禅者がいるがその性格はまったく異なる。白隠は伝統的な禅の型の中にありながら、しかもそれを新しく再組織したのに反して、盤珪は一切の禅の伝統の型にまったくとらわれることがなかった。それはまさに型を無視した思想であり説法であった。白隠と同じくあれだけ各地で説法したが、その法はほとんど伝わることがなかった。しかるに白隠は公案体系をもった伝統禅を継承したからこそ、これだけ法脈を盛大にすることができたのである。ここに白隠の思想史的意義が存するとみる。(鎌田茂雄「白隠—その全体像と思想的特質—」日本の禅語録十九『白隠』、講談社、58頁)

このように、白隠の仮名法語が多くの人に親しまれるものとしての思想史的意義も

さることながら、そこに文体史における意義を見いだすのが本稿のねらいである。

### 1.3. 近世仮名法語に用いられる「～底（ノ）」

おおむね前稿において用いた分類に基づいて白隠禅師の仮名法語における「底」の用法全 72 例を分類してみると、以下のようになる。

表 1. 白隠禅師の仮名法語における「底」の用法

用法	用例数
A 名詞（若しくは代名詞）+底+名詞	1 例
B 用言+底=名詞句	
B' 肯定形+底	18 例
B'' 否定形+底	2 例
C 用言+底+名詞=名詞句	
C' 肯定形+底+名詞	27 例
C'' 否定形+底+名詞	12 例
D 直読	12 例

これを『驢鞍橋』と比較すると、その間の変化が明らかになる。『驢鞍橋』中計 5 例の内訳は次のとおりである。

表 2. 鈴木正三の『驢鞍橋』における「底」の用法

用法	用例数
A 名詞（若しくは代名詞）+底+名詞	0 例
B 用言+底=名詞句	
B' 肯定形+底	1 例
B'' 否定形+底	0 例
C 用言+底+名詞=名詞句	
C' 肯定形+底+名詞	1 例
C'' 否定形+底+名詞	0 例
D 直読	3 例

全体的に用例数が少ないことに加えて、直読の例が 3 例と多数を占めていること、近

世期にあっても「～底（ノ）」の使用は限定的なものであり、中世の抜隊和尚や月庵和尚の仮名法語に比してもその用法の範囲が狭められていることは注目してよい。以下主には白隠禅師の仮名法語を用いて考察を進める。

上に上げた白隠禅師の仮名法語における用例のうち、前稿に取り上げた抜隊禅師の『塩山和泥合水集』、『抜隊仮名法語』と月庵禅師の『月庵仮名法語』に比べると、以下の二点が注目される。

一、B”「否定形+底」2例に合わせて、C”「否定形+底+名詞」の用例が12例と、否定形に続く用法が増加傾向を示していること。

二、C’「肯定形+底+名詞」27例とC”「否定形+底+名詞」12例のうち、「底」に後続する名詞が種々多様に涉っていること。

この二点はいずれも「～底」の用法が連体修飾の用法において盛んに用いられていたことを示すものと見てよさそうである。そして、B’「肯定形+底」18例のうち、次の例のように、「肯定形+底+にて」の形で用いられている用例も中世の仮名法語にはない用法として注目したい。因みに、これは中国語の「底」としてはありえない用法である。

1. 焰ノ内ヲ目枯レモセデ詠メ居ケルニ、奔馬ノ馳セ通ル如クナル早ヤ手ナレバ、次第ニ火勢モ弱リ、煙モ薄ク成リ行キケルニ、定休庵ハ 本ノ打チ傾キタル底ニテ、少シモ焼ケ・タル迹モナクテ、灰燼ノ裏ニ儼然トシテサウバンノ響キモ念佛ノ音ヘモ、尋常ネ初夜静定杯勤玉フニ少モ替ラデ、妙ヘニ貴ク聞ヘケレバ、人々烈焰ヲ隔テ伏シ轉ビ、感涙骨ニ徹リ、悲嘆肝ニ銘ズ。『假名因縁法語・休心坊、火難ニ逢ウ事』

## 2.0. 近世における「底」と「躰」との混用

近世仮名法語における「～底（+名詞）」の用法として、もっとも注目すべきは、「底」と「躰」が混用されていることである。しかしこれは近世に始まったことではない。

日本語として用いられる一字漢語「躰（体・體）」がいったいいかなる漢文の文体からもたらされたものであるかについては審かにしないが、古い用例としては『今昔物語』に散見するほか、『古本説話』、『無名抄』、『平家物語』、仮名法語に用いられる一方で、『謡曲』、キリシタン資料の『こんてむつすむん地』、抄物などにまで広く用いられているようである。試みに『今昔物語』の例を示すと、次のようなものである。

2. 山然レバ佛神ニ祈請シテ子ヲ儲ケム事ヲ願ヒツルニ、今我が國ニノ内ニカハル者出来リ。定メテ知ヌ、此レ我ガ位ヲ継ヒガ為ニ佛神ノ給タル者也。況ヤ、者ノ躰ヲ見ル

二、更ニ只者ニ非ズ」ト喜テ、忽ニ御子ノ宮ニ立テ傳ク事无並シ。『今昔物語・卷六』

この「者ノ<sup>トイ</sup>躰」は、漢文の用法として一般的ではない。強いてこれに近い表現を漢文に求めれば、たとえば次のようなものになろう。

3. 陰陽合徳し、而して剛柔に體有り。孔穎達疏：「若し陰陽合はざれば、則ち剛柔の體従つて生じる無し。以て陰陽相ひ合し、乃ち萬物を生ず、或は剛或は柔、各々其の體有り。」（『易・繫辭下』）（原文：「陰陽合徳、而剛柔有體。」孔穎達疏：「若陰陽不合、則剛柔之體無從而生。以陰陽相合、乃生萬物、或剛或柔、各有其體。」）

4. 端は體の序無くして而して最も前の者なり。（『墨子・經上』）（原文：「端、體之無序而最前者也。」）

この二例の「體」は何れも「形体、物体」の意である。これを、『今昔物語』に用いられる「～の躰」の用例、たとえば「衣服ノ躰」、「風波ノ躰」、「寺ノ躰」、「物ノ躰」、「山ノ躰」、「裏笥ノ躰」、「嶋ノ躰」などと比べれば、日本語としての「躰」の用法がものの「様子」、「様態」といった意味に傾いていることが明らかである。こうして見れば、『今昔物語』よりも先にすでに「体（躰・體）」が漢文の用法から逸脱して日本語化していたことが推測されるが、その具体的な経路については今後の調査にゆだねたい。

一方、近世仮名法語における「底」と「躰」の混用であるが、すでに前稿において指摘した抜隊禅師の『塩山和混合水集』と『抜隊禅師仮名法語』に用いられていた「是底」（計4例）も元をたどれば、『沙石集』、『太平記』の下記の用例との混同であったと考えられる。

5. 物クルハシキニコソト、看病ノ者思ふ程ニ、アマリニ無術カリケル時ミレバ、股ノ肉ムラ、サナガラヨク刀ニテ切トリタルガゴトシ。慥かノ事ト承はりキ。是體ノ事アマタ侍レドモ、一つニテタリヌ。ヨテ不注。遠江ニモスル事、近キビアリキ。『沙石集』

6. 去程ニ兵佛殿ニ亂レ入ツテ、佛壇ノ下天井ノ上迄モ無殘所搜シケルガ、餘リニ求メカネテ、是體ノ物コソ怪シケレ。アノ大般若ノ櫃ヲ開見ヨ。」トテ、蓋シタル櫃ニツヲ開イテ、御經ヲ取出シ、底ヲ翻シテ見ケレドモヲハセズ。『太平記』

しかし、白隠禅師の仮名法語における「底」と「體」との混同はかかる用法ではなく、次のような場合である。

7. 彼ノ山ノ半途ニ、地獄トテ、湯ノ湧キ出ル処ロナン有リケルニ、今朝ニ限リテ、驟シク湯氣ノ上ガリケルヲ、伴レドモ立チ留テ詠メ居ケル處ロヘ、傳教モ取り亂ダシタル底ニテ追イ

付キ、湧キ湯呑マントテ、手サシ入レケルガ、手引キ出セバ堪ヘガタク熱ク、手サシ入レバ左モナカリケレバ、『布鼓・那須ノ傳教、生キナガラ奈落ニ沈ム事』

8. 女房ハ、案ノ外ナリケレバ、カラナゲニ、スゴスゴト立チカヘリ、引キカツキ伏シ居タリケルガ、屹ト思イ付キタル底ニテ、ハネ起キ、「母ゴゼ母ゴゼ」ト、混呼ビニ呼ビカケタリケレバ、母モ如何ニヤ答ユレドモ、カマワデ、「母ゴゼ母ゴゼ」トノミ云ケリ。『布鼓・不孝ノ娶、狼ニ化スル事』

9. 「今日ハ己レハ物ホシカラネバ、和ドノニ参ラスルゾ」トテ、指シ出シニタリケレバ、李生ハトツツヨキツ、熟々ト打チ見テ、瞋レル眼コニ涙ヲナン洒ギテ、且ラク思案シケルガ、屹ト思イツキタル体ニテ、妻ヲナン呼ビテ、「女房ヨ、疾来リテヨ。・・・」『布鼓・餅ニ小兒ノ糞ヲ塗リテ、母ニ進メシ事』

10. 「百味ノ・ゲ物ドモ受ケ玉イネ、貧女ガ一灯トモゴランゼヨ」トテ、手打チ合セテ、ウレシゲニ守リ居ケル処ヘ、文七ハ取りミダシタル体ニテ、外面ヨリ立チ飯リ、「母人トヨ、物ノホシキニ、早く給ビテヨ」ト、ワメキ入りケレバ、・・・『布鼓・宇佐美文七、亡魂ト戦フ事』

ここに引いた例7と10、8と9が同じく白隠禅師の自筆本『布鼓』に見られることは、両者が同一作者、同一作品において同じ表現においてほとんど区別なく用いられていることを物語っている。そして、これは何も『布鼓』に限ったことではなく、先に引いた例1も同じく白隠禅師の自筆稿本『假名因縁法語』に現れていることを考え合わせれば、白隠禅師にとっては両者の混同はいかに自然なものであり、また避けがたいものであったかが想像に難くない。実際両者が混用される状況では、下記の例11の「テイ」というかな書きもいわば偶然というよりは必然な表記と言えるかもしれない。そもそも音形を同じくする別の語だったもの同士が混用の結果、同一の音形に両方の意味が宿ることになったのである。

11. 能々見レバ、アサマシヤ、吾ガ女房ノ頭ベハ、モハヤ犬ニナリスマシテ、衣類モ手足モマダ人ニテ、恐レイリタルテイニテ、ブルブルトフルヘテ、スクミ居タリケリ。『布鼓・餅ニ小兒ノ糞ヲ塗リテ、母ニ進メシ事』

そして、ここに引く「用言+テイ+ニテ」の形もそもそも『太平記』の次のような用例に通じるものであろう。

12. 只一夜松ノ嵐ニ御夢ヲ被覺、主忘レヌ梅ガ香ニ、昔ノ春ヲ思召出スニモ、昌泰ノ年

ノ末ニ荒人神ト成セ玉ヒシ、心ツクシノ御旅宿マデモ、今ハ君ノ御思ニ擬ヘ、又ハ御身ノ歎ニ被思召知タル、哀ノ色ノ數々ニ、御念誦ヲ暫ク被止テ、御涙ノ内ニカクバカリ、忘レズハ神モ哀レト思ヒシレ心ツクシノ古ヘノ旅ト遊シテ、少シ御目睡有リケル其夜ノ御夢ニ、衣冠正シクシタル老翁ノ、年八十有余ナルガ、左ノ手ニ梅ノ花ヲ一枝持チ、右ノ手ニ鳩ノ杖ヲツキ、最苦シゲナル體ニテ、御局ノ臥給タル枕ノ邊ニ立チ給ヘリ。『太平記』

### 3.0 明治時代における「底」と「体」

新潮社刊 CD-ROM『明治の文豪』を用いて「～底（の）」を中心に検索をしてみると、夏目漱石の7例をはじめ、森鷗外、長塚節、泉鏡花には各1例見つかった。以下これらの用例の分析を通して、近代文学における「～底の」の用法と近代の書き言葉におけるこの語法の文体的な特徴を見てみたい。

#### 3.1 夏目漱石の場合

13. 一代の画工が精力を消耗して変化を求めた顔でも十二三種以外に出る事が出来んのを以て推せば、人間の製造を一手で受負った神の手際は格別な者だと驚嘆せざるを得ない。到底人間社会に於て目撃し得ざる底の伎倆であるから、これを全能的伎倆と云つても差し支ないだろう。夏目漱石『我が輩は猫である』

14. 「そうそう、ウェルテル君のヴァイオリン物語を拝聴する筈だったね。さあ話し給え。もう邪魔はしないから」と迷亭君が漸く鋒鏑を取めると、「向上の一路はヴァイオリンなどで開ける者ではない。そんな遊戯三昧で宇宙の真理が知れては大変だ。這裡の消息を知ろうと思えばやはり 懸崖に手を撒して、絶後に再び蘇える底の気魄がなければ駄目だ」と独仙君は勿体振って、東風君に訓戒じみた説教をしたのはよかったが、東風君は禅宗のぜの字も知らない男だから頓と感心した容子もなく「へえ、そうかも知れませんが、やはり芸術は人間の渴仰の極致を表わしたものだと思いますから、どうしてもこれを捨てる訳には参りません」夏目漱石『我が輩は猫である』

15. 唯哲人ヘーゲルなるものありて、講壇の上に、無上普遍の真を伝うると聞いて、向上求道の念に切なるがため、壇下に、わが不穩底の疑義を解釈せんと欲したる清浄心の発現に外ならず。この故に彼等はヘーゲルを聞いて、彼等の未来を決定し得たり。自己の運命を改造し得たり。のっぺらぼうに講義を聴いて、のっぺらぼうに卒業し去る



公等日本の大学生と同じ事と思うは、天下の己惚なり。公等はタイプ、ライターに過ぎず。しかも慾張ったるタイプ、ライターなり。公等のなす所、思う所、云う所、遂に切実なる社会の活氣運に関せず。死に至るまでのっぺらぼうなるかな。死に至るまでのっぺらぼうなるかな」と、のっぺらぼうを二遍繰返している。「ヘーゲルの講義を聞かんとして、四方より伯林に集まれる学生は、この講義を衣食の資に利用せんとの野心を以て集まれるにあらず。夏目漱石『三四郎』

16. 高柳君は今まで解脱の二字に於て曾て考えた事はなかった。只文界に立って、ある物になりたい、なりたいがなれない、なれんのではない、金がない、時がない、世間が寄ってたかって己れを苦しめる、残念だ無念だとばかり思っていた。あとを読む気になる。「解脱は便法に過ぎぬ。下れる世に立って、わが真を貫徹し、わが善を標榜し、わが美を提唱するの際、尽泥帶水の弊をまぬがれ、勇猛精進の志を固くして、現代下根の衆生より受くる迫害の苦痛を委却する為めの便法である。この便法を証得し得ざる時、英霊の俊兒、また遂に鬼窟裏に墮在してかの所謂芸妓紳士通人と得失を較するの愚を演じて憚らず。国家の為め悲しむべき事である。「解脱は便法である。この方便門を通じて出頭し来る行為、動作、言説の是非は解脱の関する所ではない。従って吾人は解脱を修得する前に正鵠にあたる趣味を養成せねばならぬ。下劣なる趣味を拘泥なく一代に塗抹するは学人の耻辱である。彼等が貴重なる十年二十年を挙げて故紙堆裏に兀々たるは、衣食の為めではない、名聞の為めではない、乃至爵禄財宝の為めではない。微かなる墨痕のうちに、光明の一炬を点じ得て、点じ得たる道火を解脱の方便門より担い出して暗黒世界を遍照せんが為めである。「この故に真に 自家証得底の見解 あるものの為めに、拘泥の煩を払って、出来得る限り彼等をして第一種の解脱に近づかしむるを道徳と云う。道徳とは有道の士をして道を行わしめんが為めに、吾人がこれに対して与うる自由の異名である。この大道徳を解せざるものを俗人と云う。夏目漱石『野分』

17. それにしても昨日あの女のあとを付けなかったのは残念だ。もし向後あの女に逢う事が出来ないとするとこの事件は判然と分りそうにもない。いらぬ遠慮をして 流星光底 じゃないが逃がしたのは惜い事だ。元来品位を重んじ過ぎたり、あまり高尚にすると、得てこんな事になるものだ。人間はどこかに泥棒的分子がないと成功はしない。紳士も結構には相違ないが、紳士の体面を傷けざる範囲内に於て泥棒根性を発揮せんと折角の紳士が紳士として通用しなくなる。泥棒気のない純粹の紳士は大抵行き倒れになるそうだ。夏目漱石「趣味の遺伝」『倫敦塔・幻影の盾』

18. このむさくろしき兵士等は仏光国師の熱喝を喫した訳でもなからうが驀地に進むと云う禅機に於て時宗と古今その揆を一にしている。彼等は驀地に進み了して曠如と吾家に帰り来りたる英靈漢である。天上を行き天下を行き、行き尽してやまざる底の気魄が吾人の尊敬に価せざる以上は八荒の中に尊敬すべきものは微塵程もない。黒い顔！中には日本に籍があるのかと怪まれる位黒いのが居る。夏目漱石「趣味の遺伝」『倫敦塔・幻影の盾』

19. 写生文家の人間に対する同情は叙述されたる人間と共に頑是なく煩悶し、無体に号泣し、直角に跳躍し、一散に狂奔する底の同情ではない。傍から見て気の毒の念に堪えぬ裏に微笑を包む同情である。冷刻ではない。世間と共にわめかない許である。従つて写生文家の描く所は多く深刻なものでない。否如何に深刻な事をかいても此態度で押して行くから、一寸見ると底迄行かぬ様な心持ちがするのである。しかのみならず此態度で世間人情の交渉を視るから大抵の場合には滑稽の分子を含んだ表現となつて文章の上にはあらはれて来る。夏目漱石「写生文」

まず、この7例の用いられた文脈を見てみると、14、16、18の3例はともに禅を語るものまたはそれに類した文脈に用いられていることが注目される。これはすでに前稿において指摘したように、「～底（の）」が禅宗の仮名法語から由来していることによるものと見て間違いない。そして、他の4例はすなわち同じ語法が一般的な文章へとその用法を広げていった結果と見ることができる。概していえば、この二通りの用法はいずれも禅宗仮名法語のなかでも中国語の「～底」に沿ったものといえる。これは他の作家のものと比較するときにいっそう明確になるところである。

### 3.2 他の作家の場合

夏目漱石において「～底（の）」の用法が比較的多く用いられているのに対し、他の作家の用例は少数に限られる。森鷗外、長塚節、泉鏡花の例を次に挙げる。

20. 畑は快男子である。戦略戦術の書を除く外、一切の書を読まない。浄瑠璃を聞いても、何をうなっているやらわからない。それが不思議な縁で、ふいと浪花節と云うものを聴いた。忠臣孝子義士節婦の笑う可く泣く可く驚く可く歎ず可き物語が、朗々たる音吐を以て演出せられて、処女のように純潔無垢な將軍の空想を刺戟して、將軍に唾壺を撃砕する底の感激を起さしめたのである。畑はこの時から浪花節の愛好者となり、浪花節語りの保護者となった。森鷗外『余興』

21. 不義、毒殺、たとえば父子、夫妻、最親至愛の間に於ても、其の実否を正すべく、是を 口にすべからざる底の条件 を以て、咄嗟に雷発して、河野家の家庭を襲ったのである。私は掏賊だ、はじめから敵に対しては、機謀権略、反間苦肉、有ゆる辣手段を弄して差支えないと信じた。泉鏡花『婦系図』

22. 「本当によ、丸っきり狂気のようななあ」という驚異の声が到る処に反覆された。「唯たあ思えねえよ、勘次さんもあいに仕ねえでもよかんべと思うのになあ」嘆声を発しては各自の心に伏在している或物を口には明白地に云うことを憚る様に眼と眼を見合せて互に笑うては 僅に「厭だ厭だ」という底に 一種の意味を含んだ一語を投げ棄てて別れるのである。殊には村落の若者の間へは寸毫も遠慮の無い想像に伴う陰口を逞しくせしめる好箇の材料を提供したのであった。長塚節『土』

このように、森鷗外、泉鏡花、長塚節にそれぞれ1例という、けっして多くはない用例数であるが、とりわけ例 20、21 はまったく一般的な文脈において用いられていることは、漱石におけるのと同様、かかる語法の一般化を示す用例と見てよさそうである。そして、例 22 の一例は、とりもおさず「躰」の用例への類推による混用と考えられる。これは「底」に先行する用言がその動作性よりも形式的な「という」であること、「底に」の形の連用修飾に終わっていることに徴して明らかである。これは節 3.4 に触れることになる例 35 と通じ合うこともいうまでもない。

### 3.4 夏目漱石の作品における「～体」の使い方

同じく新潮社版『明治の文豪』CD-ROM 版を用いて、夏目漱石の以下の作品における「<sup>たい</sup>体」を検索した。

『吾輩は猫である』、本文 1044 頁

『倫敦塔・幻影の盾』、本文 435 頁

収録作品：「倫敦塔」、「カーライル博物館」、「幻影の盾」、「琴のそら音」、「一夜」、「薙露行」、「趣味の遺伝」

『坊っちゃん』、本文 290 頁

『三四郎』、本文 563 頁

『それから』、本文 593 頁

『門』、本文 467 頁

『明暗』、本文 1162 頁

検索結果は表 3 の通りである。

表 3. 夏目漱石の作品における「体」の用法

作品名	用例数	本文頁数	摘要
『吾輩は猫である』	26	1044	内 名詞+体 1 例：書生体の男
『倫敦塔・幻影の盾』	7	435	
『坊っちゃん』	2	290	
『三四郎』	1	563	
『それから』	2	593	内 名詞+体 1 例：車夫体の男
『門』	1	467	
『明暗』	1	1162	

まず注目したいのは、『吾輩は猫である』の「～体」の用例が 26 例と最も多く、他の何れの作品よりも多用されていることである。これは猫の目から見た人間模様をかなり勿体ぶって語るという視点の設定と猫の性格に大きく依存している結果と見てよいであろう。そして、全 26 例の内訳を見てみると、最も多いのは「～の体である」の 13 例、続いて「～の体で～」、「～体に（見える・見受けられる）」各 5 例の順である。残る他の 3 例は、それぞれ「解しかねたところを無理に納得した体にもてなす」1 例、「美学者の迷亭がこの体を見て」1 例、「書生体の男」1 例である。この内訳も小説の視点と書き方の特殊事情に一致するところである。

次に注目したいのは、この内訳に明らかなように、「～体（の）+名詞」の用法が一例もなく、先に見た「～底（の）+名詞」の用法と相補的に使い分けられていることである。これは、近世仮名法語における両者の混用は「～底」がその用法を広げたために、「～体」の用法に一方向的に接近した結果であるのと軌を一にする。しかも近世の仮名法語において両者が混用されるようになってからも、連体修飾節には「～底（の）+名詞」を用いるという区別意識が依然強く働いたものと思われる。

ちなみに、「～体（の）+名詞」の用法は、管見の限り、『沙石集』に次のような 3 例を見るほか、中世、近世の仮名法語には一例もない。

23. 「兒共ハ、學問ナムドスルコソ、サアルベキ事ナレ。コノ兒、歌ヲノミスキテ、所詮ナキ物ナリ。アレ<sup>てい</sup>體ノ物アレバ、餘ノ兒共モ見マナビテ、不用ナルニ、明日里へ返シヤルベシ」ト、同宿ニ能々申含クメラレケルヲモ不知シテ、『沙石集』

24. 物クルハシキニコソト、看病ノ者思フ程ニ、アマリニ無術カリケル時ミレバ、股ノ肉ムラ、サナガラヨク刀ニテ切りトリタルガゴトシ。髓カノ事ト承ハリキ。是體ノ事アマタ侍レドモ、一ツニテタリヌ。ヨテ不注。遠江ニモスル事、近比アリキ。『沙石集』
25. 「禪ノ法門ト云フ事未聞。何カ體ノ法門ゾ」ト、被仰ケレバ、上人申サセ給ヒケルハ、「下座ニ居テ法門申ス事ハ、佛法ノ中ニ候ワヌ事」ト申ス。『沙石集』

これらは、いずれも指示詞の類が「てい」と熟合された形であり、普通の連体修飾節に用いられるものとは範疇を別にするものである。『吾輩は猫である』にある「書生体の男」、「車夫体の男」も同じである。

次に『吾輩は猫である』からそれぞれの用法を一例ずつ挙げておく。

26. 「猫はどうでも好いが、着物をとられたので寒くていかん」と大に銷沈の体である。夏目漱石『吾輩は猫である』
27. 主人は思わぬ発見をして感じ入った体で、ふっと吹いてみる。夏目漱石『吾輩は猫である』
28. 美学者の迷亭がこの体を見て、産気のついた男じゃあるまいし止すがいいと冷かしたからこの頃は廃してしまった。夏目漱石『吾輩は猫である』
29. これだけ装飾がととのったところへ、下女が這入って来て坊ばの着物を拭いた序に、すん子の顔もふいてしまった。すん子は少々不満の体に見えた。夏目漱石『吾輩は猫である』
30. 僅かに三字のゆきさつだが鼻の下があるのとないのとでは大変感じに相違があるよ」「成程」と東風君は解しかねたところを無理に納得した体にもてなす。夏目漱石『吾輩は猫である』
31. 頭を奇麗に分けて、木綿の紋付の羽織に小倉の袴を着て至極真面目そうな書生体の男である。夏目漱石『吾輩は猫である』

### 3.4 現代語の場合

現代語の「～底(の)」の用法は、もちろん主に禅宗文献においてである(井原徹山(1941)を参照)が、その一般化を示すために、ここでは一般的な文章の用例を取り上げる。

32. 洒々落々底 を気取どった現実承認派が言いそうなデテルミニズムはみごとに脱落し、すべてが相互に呼びあい、支えあい、現実化しあっている、盡界現成、遍界不曾蔵の世界の、澄明な素描がここに提出されているのが分るでしょう。(寺田透「中世法語の文学性―道元と一遍―」『文学』第三十七巻第十号、13頁)

33. なお、ここでお断りしておかなければならないのは、第五巻Ⅲに収めた告辞類の表題についてである。このうち「一六」乃至「二一」の表題は『私の哲学と人生観』に収録の際、その編者(木場)が付けて著者の了承を経たものであるが、同書の出版以後に属する「二二」乃至「三六」の表題は、本全集の編修に当たって仮に付けたものである。遠からずといえども当たらざる底のものもあるが、前例に倣った措置と見なしていただければ幸いである。(『高橋里美全集』第七巻「編者後記」、323頁)

34. 第二の差異は、倒置句の文の種類の問題である。後者の「心ゆも我は思はずき」は純然たる平叙文に属し、前者の「思ひきや」はいわゆる疑問文に属する。歌全体が倒置法という感動的・詠嘆的な手法にもとづいて構成されている以上、冒頭の倒置句に、平叙文を据えるのと疑問文を据えるのでは、当然、いちじるしい効果のちがいが出てくる。その点、倒置句に、平叙文に疑問文「思ひきや」を据えることによって、「遠イキナカへ別レテ来テ居テ、此ヤウニオチブレテ、獵師共ノスルシゴトヲマアセウトハ思フタカイ、思ヒモヨラナダ事ヂヤ」(古今集遠鏡)という底のゆたかな余韻をただよわせている前者は、わずか五音節の短句であるにもかかわらず、「心ゆも我は思はずき」という後者の、具体的ではあるが、平板で冗長な叙述から完全に脱却しきっている。(佐竹昭広「萬葉・古今・新古今」『萬葉集抜書』岩波書店、3頁)

このわずか3例のうち、32は中世仮名法語をテーマとすることによる連想の結果であり、33、34は一般的な文章である。特に例34は、先の節3.3において挙げた長塚節の「僅に「厭だ厭だ」という底に」の例と同じく、「～体」との混用と思われる。そして、おそらく「底」と「体」との混用を踏まえているであろう次の用例も、現代語の用例として注目に値する。

35. 法語の側から見れば、それは法語を支えている佛教的人生観の影響を受けてのことであるが、女に逢いたい恋しいのというのでは何か物足りないものがある、愛欲の迷いから離れて、決然として女性を斥けるていの力強い文芸があつてよいはずであるが、従来の伝統的な文芸を支持する側からいえば、愛欲とか女性とかをそういうふう考えるのがおかしい。それでは文芸というものがわかっていないことになるの

である。井手恒雄「法語文芸・非文芸」『文学』第三十七卷第十号、23頁

これは同じく中世仮名法語をテーマとしながら、「底」とも「体」とも表記せずに、「てい」に傍点を施すという表記の意味するところは、おそらく「てい」において両者の表現性が凝縮されていることへの是認とその積極的な応用を示すものと見てよいであろう。そして、先に『吾輩は猫である』には、「～体(の) + 名詞」の用法が一例もなかったのと比べれば、ここの「愛欲の迷いから離れて、決然として女性を斥けるていの力強い文芸」にみるように、両者の混用はついに連体修飾節にまで及んでいると見ることができる。

#### 4.0 まとめ

道元禅師の『正法眼蔵』において「～底」を用いる表現が最初に観察されて以来、中世後期の禅宗仮名法語において既に連体修飾節に用いるものとして日本語化した「～底(の)」の語法は、近世においてもひきつづき禅宗の仮名法語に盛んに用いられる一方で、それよりさらに古い語法の「～体」との混同が起こった。これは白隠禅師の仮名法語において特に著しい傾向である。これはかかる用法のさらなる日本語化を示すとともに、同じく連体修飾節を受ける「～体」の用法の領分を一方向的に侵した結果でもある。

近代の文学作品に用いられる「～底(の)」の用法を調査した結果、用法そのものとしては基本的に近世仮名法語のそれを踏襲しているが、「～体」との混同もそのまま近世のものを受け継いだ感があり、この混同は現代語においてもそのまま踏襲されているところである。そして、夏目漱石の作品においてすでに禅宗関係の文脈に主に用いられる一方で、一般的な文章への用法の一般化もすでに見られた。現代語においてもこの一般化の流れは引き続き受け継がれている。しかし、現代語においては、「～底(の)」と「～体」の語法はいずれもすでに古風な文体指標として連体修飾節に用いられているに止まっており、ほそぼそと一縷の命脈を保ちつつ、もはや他の連体修飾節に用いられる語法、たとえば「～スルところの～」の類によってすっかりその用法を狭められつつある現状にある。

## 参考文献:

- 井原徹山（1941）「禪の文字—禪語の文法學的考察、特に品詞篇—」『禪』第六卷、雄山閣、1-123 頁
- 入矢義高（1983）「禪語つれづれ」『求道と悦楽—中国の禪と詩』岩波書店、120-167 頁
- 入矢義高（1992）「中国口語史の構想」『空花集—入矢義高短編集』岩波書店、221-243 頁
- 入矢義高（1992）「白話文と白話小説」『空花集—入矢義高短編集』岩波書店、244-249 頁
- 鎌田茂雄「白隠—その全体像と思想的特質」日本の禪語録十九『白隠』、講談社、11-58 頁
- 川瀬一馬（1970）『五山版の研究』日本古書籍商協會
- 金 兆梓『國文法之研究』中華書局 1955 年
- 曹 廣順（1995）『近代漢語助詞』語文出版社
- 田島毓堂（1978）『正法眼藏の國語學的研究資料編』笠間書院影印本
- 中村 元（1964）「仏教の民衆教化と仮名法語」日本古典文学大系『仮名法語集』月報、1-3 頁
- 永久岳水（1934）「禪門曹洞法語全集解説」『禪門曹洞法語全集』坤、中央佛教社、1-47 頁
- H.Maspero 馬伯樂（1944）「晚唐幾種語録中の白話」『中国學報』第 1 卷 1 期、73-91 頁、馮承鈞譯
- 山田孝雄（1935）『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』宝文館
- 横關了胤（1944）『瑩山禪師傳光録』解説、『瑩山禪師傳光録』岩波文庫、岩波書店、331-339 頁
- 芳澤勝弘編注『白隠禪師法語全集』禪文化研究所、2002 年
- 呂 叔湘（1943）「論底地之辨兼及底字的由來」『漢語語法論文集』中国科学院語言研究所編輯、科学出版社出版、1955 年、51-58 頁